ふるさとの歴史をより身近なものに

～出前授業における出土品の活用について～

調査課　佐竹　正憲

考古学コラム「きずな」NO.12
平成 28 年 3 月 7 日
岐阜県文化財保護センター

＜はじめに＞

当センターが実施している教育普及活動の一つに、「出前授業」があります。平成27年度は、岐阜県下の小・中・高等学校延べ55校（91学級、児童生徒数2,303名）で実施することができました（2016年2月28日現在）。授業後のアンケートでは多くの学校から、実際の出土品を用いることについて、好評を得ています。このことは、多くの県内出土遺物を収蔵する当センターならではの強みであり、今後も大切にしていきたい活動です。そこで今回は、出前授業における出土品の活用についてお話しします。

＜観察用遺物の選定＞

【写真１　観察用石器セット】

出前授業では、実際の出土品を観察することを通して、当時の人々の生活の様子を考える活動を位置づけています。縄文時代の授業では、写真１のような石器のセットを用いて、複数の石器の形状を観察し、それぞれの用途を考える活動を行います。これらの出土品は、膨大な数の収蔵遺物の中から、活動の目的に応じて、子どもたちに着目させたい情報が確実に残されているものを選定しています。

打製石斧の用途として、現在のスコップのように用いられていたという考え方があります。子どもたちがスコップをイメージしやすいよう、形状の近いものを選ぶように心がけています。また、石錘は網を固定するための切り込みがはっきりと確認できるもの、石鏃は先端が鋭く尖っているもの、磨石は触っただけでつるつるしている範囲が分かるものをそれぞれ選んでいます。こうした配慮は、弥生時代の授業で使用する土器を選ぶ際も同じです。縄文土器と弥生土器の特徴がはっきりと分かるよう、厚さや飾り、胎土等、子どもたちに気づいてほしい事実が如実に表れているものを選んでいます。

このように、子どもたちの「分かった」感を高めるために、意図的に出土品を選んでいるのです。

＜観察用遺物数の確保＞

限られた授業時間の中で、子どもたち一人ひとりが出土品に触れる時間を確保するため、持参する出土品は十分な数を用意しています。観察用土器片セットは、一人ひとりが実際の出土品にじっくりと触れ、比べながら事実を見つけられるように、学級全員に行きわたる数量を用意しています。縄文土器、弥生土器、須恵器、灰釉陶器、山茶碗について、学級全員に行きわたる数量を用意しています。

【写真２　土器片を観察する児童】

石器セットは一人ずつではなく、グループ毎に４種類の石器を用意しています。これは石器の特徴を見つけ、その特徴から用途を想像する活動を位置づけているためです。土器を比較する活動よりやや難易度が高いと思われることから、グループで相談しながら活動します。このように、数を確保すると同時に、学習内容に応じて資料の数を工夫しています。

＜地域や時代を象徴する遺物の活用＞

【左：写真３　古墳出土の須恵器の器台】
【右：写真４　古墳出土の鉄刀を観察する児童】

授業の終末では、子どもたちに「ふるさと岐阜」のよさを体感してもらうため、地域や時代を象徴する出土品を持参します。写真３の須恵器は、中学校歴史教科書に掲載されているもので、高さは約 50cm あります。この須恵器を提示すると、「わあ、すごく大きい。」、「立派だ。」といった声が上がります。写真４は鉄刀です。「こんな時代にもあったんだ。」、「岐阜県でも出土しているんだな。」といった声が上がります。普段は教科書の中の出来事だった歴史が、自分の身の回りにもあることに気づかせることで、郷土の歴史について少しでも興味をもってもらえるように、こうした貴重な出土品を間近で見られる機会を設けています。

＜おわりに＞

出土品を前にした子どもたちの表情は生き生きしています。出土品との出会いを通して、歴史的事象と子どもたちとの距離は確実に縮まります。より多くの子どもたちにとって、出前授業での出土品との出会いが、「ふるさと岐阜」への誇りや愛着を育む契機となるよう、より効果的な出土品の活用を目指していきたいです。